

ひまわり訪問看護ステーション あけぼのサテライト

症例概要 利用者氏名：G 様（60代 男性 身体障害者手帳1級）

利用期間：平成28年 11月～ 継続中

経過：

- ・平成22年8月に自転車で転倒し受傷（N病院入院）
- ・同年洞不全症候群にてペースメーカー埋め込み術施行
- ・同年10月リハビリ目的にてI病院へ転院、平成23年5月退院
- ・平成23年5月よりひまわり当事業所利用開始

現在、訪問リハビリ 3回/週、訪問看護 2回/週、訪問介護 ほぼ毎日（6～7回/週）、通所介護 3回/週、すべてひまわりの介護サービスを利用している。

内 容

もともと積極的に前に出るような性格ではなく、また若年ということもあり、機能的な制限よりも心的要因から他者との交流や活動意欲は高くない印象を持っていた。リハビリに対しても、本人の要望が対処療法の希望が多く、課題を達成するようなことはあまり発言していなかった（特に電動車椅子で歩きたいと思わない、特にやってみたいことはない、など）。しかし、平成28年秋頃、本人からiPadを使用し、電話や各種アプリ、音楽鑑賞をしてみたいと希望が聞かれた。その後、iPadを購入し、残存機能でタッチペン操作などこなしていたが、同年11月頃、本人から「iPadをベッド柵にかけておくような棒を作れないかな」と発言があった。既製品のスタンドとは違う機能を望んでいたため、ひまわりリハスタッフ中心に自家製のスタンド作成を行う運びとなった。本人は、受傷前から日曜大工や車整備などを得意としており、頭の中で思案した設計方法をリハスタッフに伝えて作業していくという方法で進めていった。思考錯誤しながらも、約1ヵ月後に本人が思い描くスタンドが完成した。それは、自身の残存機能を十分に活かすことができる可動機能装備のスタンドであった。

この課題達成を機に、本人から活動や参加に対する意欲が聞かれ始めるようになる。現在は、ひまわりデイサービスで行われている競技ボッチャで、もう少しボールを飛ばせるようになりたいと、リハスタッフとともにグローブを作成している。今回の例では、一つの成功体験から、活動や参加意欲が増し、自身の可能性にも挑戦する姿勢が見受けられるようになった。それまでは本人の身体機能状況や性格もあり、自身の希望を他者に依頼し遂行してもらおうという意思表示はあまりなく、概ね受動的な状態であった。しかし、今回のように発信だけでなく、自らの発案をリハスタッフと討論しながら課題を達成し、実際に自分の行動が変化し、生活が変わるという体験を経て、生活の質や生きがいの向上につながったと考えられる。